

両墓制と死者へのまなざし - 茨城県の事例から -

貝田 彩夏

人が死ぬとどうなるのか。生きること・死ぬこととは何か。人々は昔から、生きている限りは知り得ない、死後の世界というものに興味を持ってきた。この考えを、“死生観”と呼ぶ。人々の死生観をうかがい知る手がかりとして墓制がある。中でも埋める墓と石塔を建てお詣りする墓とを別々に設ける両墓制について、多くの研究者が議論を重ねてきた。そして、現在は死を穢れたものとして避ける、「死穢忌避」の観念と、肉体と靈魂を別々のものとして考える、「霊肉別留」の観念から、両墓制が発生した、とされている。この通説に対し、疑問も出されてきたが、あくまでも指摘に留まり、地域の実例から検討した研究は多くない。

そこで本研究では、茨城県における両墓制事例の調査を通じて両墓制成立をめぐる再検討を行った。本研究の目的は、茨城県の実際の習俗を調査し、両墓制は死穢忌避と霊肉別留の観念が発生要因である、という通説の再検討を行うことと、それによって両墓制にまつわる死者への扱い方、考え方などの死生観の一端を明らかにすることである。

民俗調査資料や、市町村史などの文献調査から、収集した両墓制の事例は、26市町村、78事例となった。これらの事例と、先行研究で問題となっている論点を照らし合わせ、その分布や習俗などの分析を行った。

茨城県の事例の分析から、茨城県の葬送の習俗は、魂よばい、魔除けの風習など、死穢を忌避する考えが両墓制地域だけでなく県全域にみられることが分かった。両墓制地域が単墓制地域に比べて死穢の観念が強いという結果は得られなかった。また、埋め墓と詣り墓の両方に参る事例も見られた。さらに、県内の両墓制地域は筑波山麓から県西・県南部に分布していることが分かった。この分布は、密教である真言宗豊山派の寺院が濃密に分布する地域とほぼ一致している。真言宗は祈祷寺であることから、穢れを嫌った僧が墓を境内に設ける際、境内に遺体を埋葬するのを禁止する例が見られた。

以上から、茨城県の両墓制事例を分析した結果、茨城県においては、両墓制成立要因は死穢忌避の観念ではなく、詣り墓となっている寺院との関係で墓を二つに分けざるを得ない状況になったのではないかと考えられる。本研究は茨城県の事例であったが、他の地域にも同様の事例があると考えられるため、両墓制の成立要因について再度検討する余地があると言える。また、両墓制には遺体を恐れる観念と仏教の普及により生まれた死者を追悼する観念とが融合した死生観が見られた。両墓制は、当時の人々の死者への向き合い方を今に伝えている。

(指導教員 白井哲也)